# 埼玉アーツシアター通信
SAITAMA ARTS THEATER PRESS

# CONTENTS

2013.3-4
NO. 44


03 TALK NINAGAWA千の目（まなざし） 第26回
**宮沢りえ×蜷川幸雄**

06 PLAY 彩の国シェイクスピア・シリーズ第27弾
**『ヘンリー四世』**

08 PLAY さいたまゴールド・シアター第6回公演
**『鴉（からす）よ、おれたちは弾丸（たま）をこめる』**

10 PLAY **『松竹大歌舞伎 市川亀治郎改め四代目市川猿之助襲名披露』**

11 REPORT **さいたまネクスト・シアター稽古場見学会／第20回読売演劇大賞発表**

12 DANCE **コンドルズ 埼玉公演2013新作『アポロ』**
**近藤良平×長塚圭史 対談**

14 DANCE **マギー・マラン『Salves ―サルヴズ』**

16 MUSIC **フランス音楽を楽しむ** ―ドビュッシーとラヴェルの魅力―

18 REPORT **「MEET THE MUSIC ～アーティストが学校にやってくる！～」**

19 REVIEW 2013.1-2 **彩の国のアーツ**

20 **イベント・カレンダー／チケットインフォメーション**
**彩の国シネマスタジオ**

23 **THEATER BRIDGE**

COVER
彩の国シェイクスピア・シリーズ第27弾
『ヘンリー四世』
吉田鋼太郎＆松坂桃李
Photo ◎川田洋司［mosa inc.］


SAITAMA ARTS THEATER PRESS　2013.3-4　No.44
編集◎市川安紀［アルカディア社］、結城美穂子　デザイン◎中野一弘［bueno］



© 公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団
Published on 15.March 2013 All Rights Reserved by Saitama Arts Foundation

※掲載情報は、2013年2月25日現在のものです。公演は追加および一部変更される場合がありますので、ご了承ください。



TALK

公開対談シリーズ 第26回
**【NINAGAWA 千の目（まなざし）】**

宮沢さんは美しい野犬ですよ
YUKIO NINAGAWA

演出家の方を驚かせたいんです
RIE MIYAZAWA

女優　宮沢りえ

演出家・彩の国さいたま芸術劇場芸術監督　蜷川幸雄

# 宮沢りえ×蜷川幸雄

今回のゲストは、近年ますます舞台での活躍が目覚ましい宮沢りえさん。
ご本人が登場するや少年のごとく照れまくる演出家の意外？な一面も垣間見え、
艶やかに微笑むりえさんとの対談はドギマギとスタートした。

Photo ◎細野晋司

# YUKIO NINAGAWA

**蜷川（以下蜷）**　最近、宮沢さんと会うと緊張するんです。口数も妙に多くなるし、演出家として半分は失格ですね。

**宮沢（以下宮）**　大勢の前でデートしているみたいですね（笑）。蜷川さん、本当にお忙しそうですね。今年（2012年）は何本舞台をおやりになったんですか。

**蜷**　11本だそうです。イヤですね、トシを取ったら急に売れたんです。宮沢さんもそういう、仕事の波はあるものですか。

**宮**　はい。自分の意識の波もありますけど。今は舞台欲が猛然と沸いていて、来年（2013年）は舞台を３本やります。

**蜷**　その中の１本は僕のですね（７月、Bunkamuraシアターコクーン『盲導犬』）。今年、唐十郎さんの『下谷万年町物語』という作品で初めて宮沢さんと仕事をしました。初演では李麗仙さんがやった役なんですが、宮沢さんがもう素晴らしくて。真情を込めたセリフ、美しさ、そうしたものが演劇的にも完璧で、すごい女優さんだと思い

『下谷万年町物語』（2012年 Bunkamura シアターコクーン）
Photo ◎細野晋司

ながら稽古を見ていました。

**宮**　あの時は自分でも怖くなるくらい、体力と精神力のぎりぎり限界のところで稽古を重ねましたね。でも、「このくらいにしておこう」と加減してできるようなお芝居じゃなかったので。私にとっても忘れられない役です。

**蜷**　宮沢さんは稽古場で本気でやるから、ものすごく疲れると思うんです。それを間近で見るのは毎日至福の時間でした。藤原竜也君も西島隆弘君も一生懸命で、みんなで燃えるような稽古場だったね。

**宮**　そうですね。立ち稽古が始まってすぐ、まだみんなが手探り状態だった時に、藤原君が登場するシーンであり得ないくらい舞台上にダイブしたんですよね。

**蜷**　池に飛び込む場面ですね。稽古場にマットレスは一応敷いてあるんですが、ものすごい勢いでジャンプしてましたね。

**宮**　あの瞬間に私たちが目指すべき大きな道ができたと思っていて、藤原君にとても感謝してるんです。ずっと蜷川さんとお仕事をしてきた藤原君のテンションが私たちの志をグッと上げてくれた気がして、すごく嬉しかった。

**蜷**　藤原君のああいう真面目なところは、ちょっと初々しくていいですよね。

**宮**　蜷川さんに怒られる時はボロクソに怒られますけどね（笑）。

## 芝居に溺れはじめる

**蜷**　宮沢さんは野田（秀樹）さんとも仕事をしますよね。『透明人間の蒸気』（04年）を拝見しましたけど、とても素敵でした。

**宮**　ありがとうございます。

**蜷**　野田さんと僕はお互いに悪口を言いながら仲がいいという不思議な関係で、宮沢さんは野田さんの芝居には出るけれど、なかなか僕の芝居に出てくれなかったんです。「野田め、俺を差し置いて！」と（笑）観に行ったら、ホンも面白かったし、宮沢さんが素敵で、またちょっと嫉妬しました。あれは楽しかったでしょう？

**宮**　そうですね。それまで私は（坂東）玉三郎さんのお芝居などに出ていて、敷いてもらったレールの上を着実に歩いていくという作業だった気がするんです。でも『透明人間〜』の時は何もないところからみんなでレールを少しずつ創っていくような、創作的活動を初めて味わいました。人前で心を裸にするというのは、普通に考えれば異様ですよね。でも、その異様さに取りつかれ始めたのがあのお芝居だったと思います。

**蜷**　舞台の奥から走ってくる宮沢さんがものすごく鮮やかな印象でした。大変だったんじゃないですか。

**宮**　稽古場を３周走ってからセリフを言うという稽古を延々とやりました。本番でどんな状況でも息が切れずにセリフが言えるように野田さんがトレーニングしてくれたんだと思いますけど、本当に鬼だと思いました（笑）。でも、走って出ていく時がとても楽しくて、あれが本当にお芝居に溺れていくスタートだった気がします。

**蜷**　野田さんの『THE BEE』（12年）での宮沢さんも、とても良かったんですよ。野田さんの稽古では台本のセリフは崩さないで覚えるんですか。

**宮**　一言一句、絶対に崩せないですね。「ね」と「の」が違うだけでも指摘されます。

**蜷**　そうなんだ。台本を持ちながら稽古することはあるんですか。

**宮**　そういう方もいらっしゃいますけど、私は特に不器用なので、台本を持ちながら相手を見てセリフを言う、なんてことができないんです。セリフは稽古場に行く前に覚えるほうが断然やりやすいですね。蜷川さんのお稽古も、台本を持たないことが最初の条件ですよね。

**蜷**　自分の解決がつかないところを台本に目線をやることでごまかす俳優もいるんです。相手の目を見ない。それだと稽古全体のレベルが下がるので、僕はセリフは覚えてきてくださいと言っています。

**宮**　やっぱり台本を持っていると、思いがけないことが起きないんですよね。

**蜷**　そういう風に野田さんと僕は比較的同じような稽古のやり方なんですが、人によって違うんですね。そのことは割に大きな意味がある気がするんです。宮沢さんは例えば玉三郎さんに代表されるような、きちんとオーソドックスに創り上げられる舞台から、野田さんのように全く違うやり方をするところに飛び込んでいくのに躊躇はなかったんですか。

**宮**　稽古場ではよく泣いていました。自分の自信がない部分をさらけ出すのはやっぱり恥ずかしいですし、人前で何かをやるという羞恥心は今でもあります。それを自分で引きはがすことの痛さを生まれて初めて味わいましたね。その分、すべて終わった後の達成感や解放感は、一番大きかった気がします。でもそれを知ってしまうと、次はもっとそんな気持ちを味わいたいと、どんどんハードルが高くなって自分の首を絞めるんです（笑）。

## 熱きアングラへの憧れ

**蜷**　『下谷〜』の時に、宮沢さんのあるセリフが、ものを創っていく人間の背負うべきものを非常によく表していて、とても良かったんです。前回やった時には全然気づかなかった。宮沢さんは美しいだけじゃなくて、野犬がゴミ箱を漁るような――美しい野犬ですよ（笑）、底辺を生きる女の子の実感も出せるんですね。

**宮**　蜷川さんに「猥雑さがあるのが不思議なんだよな」と言われたのがとても嬉しかったんです。私は10代の頃からアンダーグラウンド・カルチャーに対する憧れがすごく強くて、原田芳雄さんや唐さんたちがいそうな場所に行っては、大人たちに混じって70年代の話をワクワクしながら聞いていました。戦後しばらくしてみんなが何かをしでかそうという時代の中で、討論し合い、ぶつかり合い、何かが生まれていったことに憧れがあります。

**蜷**　酒を飲むとすぐケンカしてね。お金がないから、物を拾って芝居のセットに使うのは当たり前でした。そういう匂いや時代の空気も含めて、宮沢さんは憧れたんじゃないかと思うんですけど。

**宮**　だから『下谷〜』の稽古場に状況劇場出身の六平（直政）さんや金（守珍）さんがいらしたのはとても大きかったんです。１日に１エピソードくらい、唐さんや状況劇場の話をしてくださって。本番が始まってからも、藤原君も西島君も私も、皆さんの楽屋で話を聞いていました。エネルギーチャージの場でしたね。

**蜷**　宮沢さんも刺激的だっただろうし、そういうことに興味を持つということが、やはり稀有な才能だと僕は思っています。宮沢さんは自分で「こういう戯曲がやりたい」という希望はあるんですか。

**宮**　もちろん、やったことのない作品にすごく興味はありますけど、それよりも演出家の方に、「この役をやる宮沢りえを見たい」と思われるほうが嬉しいですね。想像を超えるようなことをして驚かせたい！という意欲が湧くんです。

**蜷**　外国の観客にもこんなに素晴らしい女優さんがいることをわかってほしいですね。これからまだまだたくさんの仕事を一緒にしたいと思っています。

# RIE MIYAZAWA

**宮**　こちらこそお願いします。最後に私から質問してもいいですか？　蜷川さんがものを創る時の一番の底力になるものは何ですか？　私の場合はコンプレックスもあるかなと思っていて、今まで自分が生きてきた中で欠けているものを埋めたい、はねのけていきたいという思いが原動力かもしれないな、と。野田さんは「コンプレックスを原動力にしていると限界があるのではないか」と話されていて。蜷川さんのエネルギーの核にあるものは何か、お聞きしようと思っていたんです。

**蜷**　僕もどちらかといえば宮沢さんに近いと思います。まだすごいものが出来ていない、僕の作品のすごさを本当には理解されていない、という思いがあるんです。この歳になってもそういうコンプレックスは十分に原動力になる。実はそんなつまらないものが自分をかき立てていると思うんですね。もっと世界中の人に「すごい」と言わせたい、そのためにもっといい演出ができないか、というのが原動力かな。いじましいんです。

**宮**　いえ、とても魅力的です。

**蜷**　格好いい言葉で終わっちゃうな（笑）。今日は本当にありがとうございました。

**宮**　ありがとうございました。（拍手）

［2012年12月16日
彩の国さいたま芸術劇場 大ホール］

『透明人間の蒸気』（2004年 新国立劇場）
Photo ◎谷古宇正彦

みやざわ・りえ
1973年東京都生まれ。88年、映画『僕らの七日間戦争』で女優デビュー。以降、幅広い分野で活躍を続ける。主な出演作に、映画『華の愛 遊園驚夢』（01）、『たそがれ清兵衛』（02）、『父と暮せば』（04）、『阿修羅城の瞳』（05）、『花よりもなほ』（06）、『オリヲン座からの招待状』（07）、ドラマ『江〜姫たちの戦国〜』（11）など。近年の舞台では『透明人間の蒸気』（04）、『ロープ』（06）、『人形の家』（08）、『バイバー』（09）、『ザ・キャラクター』（10）、『THE BEE』Japanese Version（12）など。蜷川演出作品は『下谷万年町物語』（12）で初出演。４月『今ひとたびの修羅』（新国立劇場）に出演予定。国内外の映画賞、演劇賞を多数受賞。


衣装協力：Sportmax（株式会社マックスマーラ ジャパン）TEL. 03-5467-3700　ジュエリー協力：マリハ（マリハ伊勢丹新宿本店）TEL. 03-6457-7128